

〔翻訳〕

張愛玲「現代中国語に対する若干の小さな意見」

蟹 江 静 夫 訳

〔解題〕

張愛玲（1920.9.30 – 1995.9.8）は、1940年代日本占領下（淪陷期）上海で文壇デビューした女性作家である。代表作である「傾城之恋」（1943年）、「金鎖記」（1943年）、「紅玫瑰与白玫瑰」（1944年）などを収録した小説集『伝奇』（1944年、増訂本1945年）、自伝的エッセイ「私語」（1943年）や「燼余録」（1943年）などを収めたエッセイ集『流言』（1945年）は、いずれもこの時期における活動の集大成である。

日本敗戦後、国共内戦、中華人民共和国建国を経て、1952年、香港に移住。さらに1955年にはアメリカに移り、映画の脚本、自伝体小説の執筆や旧作の書きなおし、そして『紅樓夢』研究などに従事した。

2009年には、張愛玲の遺産相続人である宋以朗氏（張の友人宋淇、鄭文美夫妻の子）によって未発表作品『小団円』（1976年）が、翌10年には『The Fall of the Pagoda』（1963年、中国語タイトル『雷峰塔』）、『The Book of change』（1963年、『易経』）が公刊され、張愛玲研究は新たな局面を迎えつつある。

ここに訳した「対現代中文的の一点小意見」は、張愛玲がアメリカ在住時に書いた語学エッセイである。原文でわずか9ページあまりの短いものであるが、彼女の言語観や当時さかんだったフェミニズムに対する見方がうかがえる。

原載は『中国時報・人間』1978年3月15日。『中国時報』は台湾で発行さ

れている大手の日刊新聞で、『人間』はその「副刊」(文芸・学術欄)である。底本は『重訪辺城』(張愛玲全集、止庵編、北京十月文芸出版社、2009年6月)を使用した。

### 【翻訳】

この題を見たら人が驚いてしまうので、ただちに説明しておかなくてはならない。「小意見」(小さな意見)とは、べつに謙遜した「人微言軽」(地位の低い者の言うことは重んじられない)なことばではなく、ほんとうにたいへん細かくてまったくとるに足らないものであり、自分でも針小棒大だと思う。それゆえずっと書こうと思っても書かなかった。だがささいなことではないかもしれない。魚の小骨と細かい鶏の骨はもっとものにひっかかりやすく、ひいては人の命にかかわることさえある。

いくつかの新たな俗字、たとえば「噉着嘴」(口をとがらせている)の「噉」の字。もともとの「擻」が現在では「擻着屁股」(尻を突き出している)にのみ用いられ、そうでなければ名詞として用いられる。「一擻」(一本)は「一段」(一本)よりもいくぶん短い。たとえば「一擻屎」(一本の糞)。この二つの上品でない例を除き、動詞として用いられるのに「擻断了」(切断した)がある。これらのほかに「擻」の字にさらにどんな用法があるのかまったく思い出すことができない。もっともよく用いられるのはやはり「擻着嘴」(口をとがらせている)である。

同様にして、「釘眼看」(じっと見る)の「釘」の字が「盯」の字に改められた。「么」は現在ではほとんど「麼」と書くが、それは語気助詞であるため、「吧」(～だろう)「嗎」(～だろうか)「嗎」(～であるか)「嘛」(～であるに決まっている)と同じく「口」偏がついている。もともとの「么」は「什么」(なに)「這么」(こんなに)「那么」(そんなに)に限定して用いられる。

分業は分ければ分けるほど細かくなる。「煖」の字がまた加わったが、ストーブやオンドルのときにのみ用いられ、太陽の光の「暖」かさとは区別さ

れる。「暖気開放」(暖房がつく)はスチームであるが、どうにかまだ「暖気」とは書かないでいる。将来地熱で暖を取れば、きっと「取煖」とするだろう——地熱と火山は源が同じである。ここから類推するに、「人情的温暖」(人情の温かさ)は遅かれ早かれ「人情的温 [イ爰]」となるであろう。

「決不答应」(けっして応じない)、「決不屈服」(けっして屈しない)は現在では「絶不答应」、「絶不屈服」として通用している。これは英語を日本語に訳した術語「絶対」<sup>1</sup>と混同しており、「絶対」を省略して「絶」にしたと誤解している。「決不」(けっして～ない)は「決計不」であり、「絶対不」(ぜったいに～ない)とは意味が異なる。

「絶妙」(絶妙だ)「绝色」(女性の容貌が美しい)の「絶」は「絶子絶孫」(子孫が途絶える)と同じで、いずれも断絶——後継者がいないことを指し、また誰もかなわないということでもある。「絶無僅有」(きわめてまれである)の「絶」の字も断絶と解釈する。「絶無」はその次がなくなったということで、つまりそのほかになくなったということである——「僅有」(わずかにある)その一つを除いては。

旧小説の白話には「断不肯」(だんじて～しようとしない)、「断不会」(だんじて～ではない)があるが、「絶不肯」、「絶不会」はない。「断不」はすなわち「断然不」である。「決不」が同じように「決計不」であり、「絶不」とは関係ない。「絶不」は新語「絶対不」から来ていて、「決不」に取って代わり、「絶」は「決」の当て字になった。——わたし自身も当て字を用いないわけではないのに、他人のことをとやかく言っている。『張看』<sup>2</sup>の最後の一編の終わりの文で「虱子」(シラミ)を誤って「蚤子」(ノミ)としていた<sup>3</sup>。水晶氏<sup>4</sup>の手紙による指摘を受け、とても感謝している。この本が今後もし再版されたら改めよう。これは何年も前の古い原稿で、文集に収めたときに一度読みなおし、その部分まで読んだときにすこし疑問に感じたが、心の中で思ったのは鼓上蚤・時遷<sup>5</sup>だったのだろうか。

現在ひたいを「前額」と通称し、あたかもさらに「後額」があるかのよ

うだが、そんなものどこにあるのだろう。英語の「額」foreheadは分解すればfore-head(前-頭、すなわち頭の前の方)で、きっと誤訳して「前額」とした人がいて、そこから踏襲されているに違いない。さらに胸を「前胸」と称する作家もいるほどである。

「自從」(～から)を「打從」と言う。これも問題を複雑にしている。だがこれは外来の専門用語とは関係なく、国語が普及したばかりのときの誤りである。北方語では「從」(～から)を「打」と言う。「從打」はなまりで、時間を限定し、語気が強くなるようだ。おそらく一九二〇年代上海の鴛鴦胡蝶派<sup>6</sup>作家周瘦鵬<sup>7</sup>など「吳門才子」(吳派<sup>8</sup>の才子)と「江都李涵秋<sup>9</sup>」(揚州の李涵秋)などが白話で創作活動をし、誤って「從打」を「打從」としたのだろう。今に至るまで使い続ける人がいるが、これは近代白話のひとつの独特な例である。新たな名詞あるいは文言でもなければ、またいかなる方言でもなく、言語上の根拠がまったくない。

最初に白話を提唱したとき、三人称は「他」ひとつしかなかった。「她」の字を創造したのは翻訳上の現実的な必要からで、そうしなければ訳しようがなかったからである。西洋各国の「他」「她」の二語は発音が異なり、対話であろうと叙事文であろうと、聞けば、誰を指すのかすぐにわかる。これをみな「他」と訳せば、人を五里霧中に陥らせるだろう。その後さらに一步すすんで「妳」の字を作ったが、少数の人しか採用せず、この二十年ほどでようやく流行した。たまたま男女の長い対話で、誰が何を言ったか説明しないものがある。男性による「妳」はこれによって発言者が誰かを知ることができ、関連する前後の人がみなはっきりとわかる。だがこのような場面に出くわすことはめったになく、また「你」の字がよく誤植されて「妳」となってしまう、人をよりいっそう混乱させる。——その一方、「妳」の字はこれまで「你」と誤植されたことはなかった。明らかに植字工が「妳」の字を偏愛している。ひょっとしたらこの職業が男性によって独占されているために、異性が惹かれ合っているのかもしれない。ところが女も「妳」の字が好きなので、まるで「你」とすると侮辱に満ち、女性

性に欠けるかのようなのである。「妳」としないなら「您」としなければならぬ傾向が大いにあるのだ。

アメリカの新女権運動のひとつの笑い話、それは「チェアマン chairman」（議長）を「チェアパーソン chairperson」に変え、「セールスマン salesman」（販売員あるいは店員）を「セールスパーソン salesperson」に変えることである。なぜなら「マン man」の意味は「男の人」であるからなのだが、まさか女性議長や女性店員はそこに入らないとも言うのだろうか。「パーソン person」は性別を区別しない「人」である。——じつのところ「マン man」のもうひとつの意味も「人」であり、両性いずれも含まれている。——「妳」と正反対で、ひとつは女を含み、いまひとつは女を区別する——男女の差。中国人の女権論者もとても活発であるが、「妳」の字に反対する人はいない。

最近アメリカのテレビニュースでひとりの女のことを耳にした。なんとか「マン man」という姓であったかはっきり聞こえなかった——なんとか「マン」という姓はごくありふれている。西洋は中世以来ほとんど職業を姓としているからで、たとえばカーター大統領の「カーター Carter」は御者であり、ラスク元国務大臣の先祖はきっと菓子職人であったに違いない——「ラスク Rusk」は薄いトーストで作り上げたビスケットで、わたしが幼いころ病気になるとすぐにそれを食べたが、飲みこむのがとてもたいへんだった。「××マン」はすなわち「××パーソン」なのだ。たとえば漁師（フィッシャーマン fisherman）<sup>10</sup>。ある事跡によって名を得たようなものもある。たとえばトルーマン Truman（忠実な人）。もし彼女の姓がトルーマンだとしたら、「トルーパーソン」と変更を求めるだろう。司法官はこんなものは理由として成立しないと考えるだろうが、どのような人であっても改姓改名の権利を有していると法で定めているから、やはり許可を与えるだろう。

新女権運動はすべての職業を解放することを要求する。たとえば酒場の店員、牧師神父、警察。アメリカ中西部のある小さな街で女権運動に呼応

し、警部に当選した若い女性がいた。ジョニー・カーソンの夜のテレビトーク番組<sup>11</sup>に出てきたが、雄々しく意気高らかで、制服のスカートをはき、180センチ以上、体重135キロ近くで、まだ24歳、3人の男の子がいるとは見えなかった。彼女が言うには、酒場で大げんかがあったとき、急いで現場に行くと、みんな彼女を見るや馬鹿にしたように笑い、「警部」と尊んで呼び、彼女にへらず口をたたく者もいたとのこと。この太った女性はどかっと彼らの上に座り、双方のけんか闘士の上に鎮座して、あやうく死人にしてしまうところだったのだ。だが同じような背丈の男となれば、悪魔の塔のようであり、やりあってからやっとそのすごさを知るまでもない。だから警察は身長が規定に合わなければならないと条件をつけているが、これに抗議する人がいて、警察はかつて、できるだけ武力を用いずに人を威嚇するためである、と釈明したことがある。そうでなければ「矮脚虎」<sup>12</sup>ばかりになってしまう。大柄の男でも見かけ倒しかもしれず、決して背の低い人を差別しているわけではない。同様に、女性警官が少数であっても女性を差別するわけではない。若くて美しい女性警官を使って治安の悪い地区を巡回すれば、どんなに武術にすぐれていてもトラブルを起こすことは避けられない。女権運動の圧力のもとで女性警官をたくさん採用することは、じつのところ大衆が汗水たらして稼いだ金を無駄遣いしているのだ。

新女権運動のもっとも実際的なものは、「同一地位、同一賃金」というスローガンである。これまでは男性の給料のほうが高かった。使用者側の理由は男は家族を養わなければならないが、職業婦人はほとんど家庭の負担がないというものである。

権利と義務は均等であるべきで、生活能力のある女には、離婚しても扶養費がもらえなくなるという傾向がある。男は家族を養うこと以外に、兵役につき、家と国を守らなければならない。だがこれはもう問題にならない。女性は入隊を勝ち取ろうとしているのだから。

アメリカが新たに募集した女性兵士は男性とともに整列して訓練をする

が、戦場に赴いて戦うことができるのだろうか。最近『U S ニュース & ワールドレポート』誌（2月13日の号）が二人の女性兵士を招いて論争をしていた。彼女らは陸軍と空軍の附属女性部隊の中将与少将で、すでに退職している。女性の入隊に賛成する理由は現代の軍隊が機械化しており、すべてが体力に頼っているわけではないからというものである。歩兵を除き、各兵隊は女性で戦うことができる。第二次世界大戦中、ソ連は大量の女性兵士で戦争をし、空中戦には女性操縦士もいた。アメリカは徴兵制を廃止してから、兵士の供給源を拡充することが急務である。そうでなければ「全員志願兵」の目標を達成することができないのだ。

反対する者は女の最大の職責はやはり母になることで、一般的に戦争の恐ろしさ残酷さを想像することができないと考えている。だが女の辛抱強さが男に劣っているとはかぎらない。もしほかの方面が平等であるとするなら、まさに戦争の恐ろしさ残酷さが人の予想外であるからこそ、分担をしないのは公平ではない。ほかにも反対する理由がある。第一線の極度のストレスのもと、一時的に精神に異常をきたした兵士がともに戦っている女性兵士を強姦するかもしれないのだ。現在アメリカは「精神異常者」の国で、精神病患者がたいへん多く、これは杞憂ではない。女性兵士が捕虜になったら強姦されるかもしれないということは、さらに言うまでもないことだ。

いまは亡きコラムニストのステュアート・オルソップがアメリカ軍は現在公文書がおびただしく、文書係が多すぎて、戦闘兵士が少なすぎることをいつも心配していた。ほんとうに戦争が始まれば、文書などまったく役に立たず、軍隊の soft underbelly<sup>13</sup>である——直訳すれば「やわらかな下腹部」、つまり四足動物の腹部であり、人目につかないがために、「銅の頭鉄の背中」のように打撃に耐えられなくてもよいのだ。今後もし多くの女性兵士を募集しても、彼女らがみな戦わないのであれば、いきおい文書係の仕事を増設することで女性軍をあてがうことになる。「やわらかな下腹部」がさらに拡大すれば、自由世界の秘めた憂いのひとつになってしまう。

これはけっして新女権運動を否定するものではない。過去の女性運動はまだ中国で深く根を下ろしているようだ。50年間、多くのアメリカ人少女の理想は早く結婚し子をたくさん産むことであった。女性には独立した人格がなく、つけ払いで医者にかかり、請求書はみな彼女らの夫に郵送する。高級アパレル会社、人気者の医者であればあるほど、この点を堅持する一ワンランク下のものはおそらく請求書を手に入ればそれでよいのだろう、これらのことにあまりこだわらない。60年間で女子大学の職員は女性運動を始め、学校当局もやはり極度の新良妻賢母主義だった。これは当時の流行で、ちょうど現在の女権運動が一時の流行であるのと同じだ。そして最新ファッションのようであるから、極端に走らなければならない、どうしてもでたらめではかばかしいものがあるが、女性運動の主旨には影響しない。

男女には明らかに違いがある。生理的・心理的に、しかもまさしくフランス人の名言のようだ。「区別万歳！(Vive le différence!)」しかし各自の素質、気性、傾向は異なっており、違いも大きい。「十歩之内、必有芳草」(いたるところに人材がある)にもかかわらず、社会に貢献することができる、どれだけの女をうずもれさせたことだろう。性別をいくらか強調すれば、共通の人間性をいくらか減じてしまう。いまの区別で十分であり、わが国特有の「妳」の字のように、形式上の区別を加える必要はまったくない。

わたしが全集を出したとき、2冊だけひとつおとり校正し、「你」の字が「妳」に替えられていたのを見つけ、ひとつひとつすべて元通りにし、そのほかの数冊もみな代わりに直してもらうようお願いした。だが出版後もそれらを読んだことがない。夏志清氏<sup>14</sup>がまだ「妳」の字を使っていると手紙でわたしに教えてくださり、わたしは「依然故妳」(依然として妳のままである)<sup>15</sup>とため息をついた。

はじめは翻訳上の必要から、中性の「它」の字を作った。それから思いきって「牠」の字を作った人がいた。結果はやはり動物と無機物、抽象的な事物はまとめて「它」と言っている。しかしこのごろ「牠」が復活し、

さらに「衞」の字も加わった。英語では神を「he」と言うときに大文字で書く。なにがしかの人の口から出るいくつかのある名詞がみな大文字で書かれることもよくあり、それは一種の肅然とした、あたかも絶対に正しいかのような口ぶりである。大文字で書く「He」は必ず強調でありかつゆったりとしていて、荘重で響きのある牧師口調である。中国語には大文字はないものの、キリスト教について言えば、「衞」の字には使い道がある。中国の神さまに対しては適用されない。なぜならいちずに信心するという伝統がなく、話題にしてもあのような口ぶりではないからだ。関羽<sup>16</sup>はおそらく「あのお方」であり、「衞」ではないだろう。「衞」の字は使い道が狭すぎて、じつに余計である。

中国語には人名地名を大文字で書くことがなく、新たに句読点を使いはじめたばかりのとき、人名地名の左側に「——」を加えていた。だが普及せず、すぐに廃止されたのは、おそらく張國華、李素貞、蘇州、杭州とするのが余計であるばかりでなく、いささか間が抜けているからであろう。しかし世界が日増しに狭くなっている現代において、外国の見知らぬ人名地名に出くわし、しるしをつけずに、前後の語句とつなげて一緒にしたら、あたり一面ぼんやりとしてしまう。——『元史』<sup>17</sup>の難しさは、これが主な原因ではないだろうが、少なくともそのひとつではある。ページいっばいに「赤温不花」といったたぐいの人名ばかりだと、見ると頭がくらくらして、目がくらむ。

新聞でよく見かける「内羅畢」(Nairobi、ナイロビ)、「内華達」(Nevada、ネバダ)であるが、たいそう巧みに訳されており、「内」の字が内蒙古、内湖のように、一目見ればすぐ地名だとわかる。しかし「外羅畢」、「外華達」があるのではないかと人に疑問を抱かせかねない。

もし人名地名の記号があり、「内」の字に頼らず地名を表わせば、「耐羅畢」、「涅華達」と訳すことができ、「内」の字が音訳か意識かと邪推することがなくなるだろう。翻訳はことばづかいが的確で、また古文のようでなくてはいけない。人の頭の中に入るようにするのは、すでにたいそう難し

いことなのに、さらに困難を加えようとする——この折り重なった障害を取り除くのがかくも容易だとは。

いくつかの通俗的な刊行物は通俗を求めるために、翻訳する人名を一律に中国化し、みな「林曼麗」、「柯休」のようであったが、これはもちろんよい方法ではない。もしありのままに「曼麗琳林徳西」<sup>18</sup>、「休柯菲尔德」<sup>19</sup>とすれば——通常は姓と名の間の「・」もない——林徳西嬢、柯菲尔德氏ということもあるが、ただ読者の頭をくらくらさせるだけだ。

地名・船名に思いきって原文を用いても、わたしはそれらを見るといつも失敗したという感覚になる。しかし英語のアルファベットが漢字のあいだに割りこむと、十分目立ち、外国語がわからない読者はきつとかえってこれを歓迎するにちがいない。音訳した漢字の名称が、やぶから棒に前後の語句に割りこんでも、どのみち覚えられない。格調高い本や雑誌はこれらの過ちを犯すはずはないが、ただそれはほんやりとしてはっきりしない<sup>20</sup>。翻訳は世界の窓だが、われわれのガラスの窓はたいへん汚れている。

船名あるいは見慣れない機関・機構の名前を訳すとき、引用符を用いて、たとえば「某某児童保健中心」とすることがあるが、これは適切でない。なぜなら引用符はここでは「いわゆる」を表わし、敵方の機関になってしまうからである。しかし、人名地名の記号がないと、「」が万能薬になり、少なくともこの名称を脇において問題にしなければ、文章にメリハリがつく。

句読点がはじめて現れたばかりのとき、書名の左側に\_\_\_\_\_が加えられたが、これも流行せず、「」に改められ、西洋と同じように引用符が使われるようになった。これはもちろん合理的で、新たに活字をひとつ余分に鑄造する必要もない。しかし近ごろ突然「句読点ブーム」が起り、「、」が加えられた。古文にはもともと「、」があり、句ごとに右側につける「、」は、マルとは正反対で、貶義を表わすが、しかしそこに重点をおくことも兼ねていた。現在は改められて読点として使うようになった。事項や数字を列挙するのに、みな「、」を使い、この「、」が従来の読点（「、」）に取っ

て代わり<sup>21</sup>、年月日のあいだにも「、」が加えられる。だが何年何月何日に読点はまったく必要ない。

『天涯・明月・刀』<sup>22</sup>というアクション映画があるが、音訳した名前のあいだに用いられた「・」は、「、」のまちがいであろう<sup>23</sup>。観客の入りがよく、『千刀・万里・追』<sup>24</sup>などが急いで作られ、3つに区切ったタイトルが引きも切らず現れた。わたしは、人が「枯藤・老樹・昏鴉」、「小橋・流水・人家」、「古道・西風・瘦馬」と引用するのを見かけるのではないかと心配している。

「、」には少なくともまだその使い道がある。専門的な論文でひとつながりの数字や事項を列挙するとき、「、」を用いると、よりメリハリがつく。わたしが『色、戒』<sup>25</sup>というタイトルを書いたときはずいぶんためらったものだ。「色」と「戒」は2つのことにすぎなく、勘定書きを作るのとは異なり、「、」が使えないからだ。しかし『紅樓夢魘』<sup>26</sup>では「、」を採用した。ここでまた「、」を用いれば、誤解を招くかもしれない。なぜならもとの読点〔コンマ〕は使用範囲が狭くなってきているようだからだ。その結果、『色、戒』と書かざるをえなかったが、予告では誤って『色・戒』としており、現在の読点の使用の混乱がうかがえる。

「句読点ブーム」により、「三四個」「七八個」はいずれも「三、四個」、「七、八個」とする。文のあいだのコンマは停頓のしるしである。われわれが「三四個」と言ったとき、「三」と「四」のあいだにはわずかな停頓もないのに、どうして句読点をつけなければならないのか。——近代の英語ではよく読点を省略するが、長文をそのまま声に出して読むと、きっと息が続かなくなるにちがいない。それは黙読のスピードが朗読よりもずっと速く、頭の中の口調の停頓が話しことばよりも少ないからである。

そのほか、読点を加えるのは純粹にそうしなければ語句の意味がはっきりせず、前後の文がつながっていると誤解を招くかもしれないときがあるからだ。「三、四個」は話しことばを反映していないし、また意味がはっきりするからというわけでもない。中国人なら誰でも「三四個」は「三個

あるいは四個」を指すということを知っている。中国語を勉強している英米人もそれを知らないはずはない。英語も「三四個」「七八個」<sup>27</sup>なのだから。

わたしはこれまで中国語のいわゆる「禿頭句子」(はげあたまの文)<sup>28</sup>がいちばんのお気に入りだった——旧詩と話しことばのなかでは、同じくらいの分量で、訳者が「我」の字を加えている。第三人称の「one」のほうがもとの意味により近い。——このようなとらえどころのなさが中国語の特色のひとつである。だから誰よりもくどく、余計な「三、四個」、「七、八個」を見たときは、わたしはいつもちくりと針に刺されたようになる。しかし、すぐに次のようにも考えてしまう。「あら。一字分原稿料を多めにもらうのだから、どこがいけないの。」どれだけ見かけても、いつも条件反射してしまい、刺されたら、ひそかにため息をつくのだ。

「看看」(ちょっと見る)と「商量商量」(ちょっと相談する)も「看、看」、「商量、商量」となっている。まさに「三四個」が「三或四個」の「或」の字を省略したように、「看看」は「看一看」の「一」を省略したものである。つまり「稍微看一看」(ちょっと見る)のことで、ただの「看」よりも軽く気楽な感じなのだ。重ねて口調を強くするため、「看、看」は「看」よりも興奮、緊張しており、感嘆符を加えなくてはならないほどである。それゆえ「看、看」の句読点は余計であるばかりか、もとの意味を歪曲しているのだ。

これは一般的な趨勢にすぎない。学者の多くは採用していないが、ことばは生きもので、長く流行すれば、それが正しいものになってしまう。新しい俗字が次々と現れ、「「嘸」着嘴」であったり、「眼睛「盯」着」であったり、暖炉の「煖」かさと太陽の「暖」かとは異なり、「你」には男女の区別があり、動物と神にはそれぞれに三人称がある。新たに加えられた二種類の読点〔、と・〕は濫用されるが、人名地名の記号はなく、翻訳の妨げになっている。不必要な区別と句読点がますます多くなり、必要なものがない。これが現代中国語の欠点である。

## 訳注

<sup>1</sup>『日本国語大辞典 第二版』第七巻（小学館、2001年）によれば、「絶対」の初出は井上哲次郎『哲学字彙』（1881年）だとする。

「仏典に見られる「絶待」を「絶対」と改め、absoluteの訳語にあてたのは井上哲次郎で、挙例の「哲学字彙」がそれである。以後、「絶対」は、哲学用語の範囲を超え、学術用語集を含め多くの辞書に収録されて一般化した。」

<sup>2</sup>『張看』は張愛玲のエッセイ集のタイトル。香港文化・生活出版社、1976年3月刊行。

<sup>3</sup>これは張愛玲のエッセイ「天才夢」の最後の一文「生命は一襲華美的袍，爬滿了蚤子。」（生命は一着の派手な衣装、あちこちノミだらけ）のことだと思われる。「天才夢」ははじめ『西風』第48期（1940年8月）に掲載、のち『張看』に収録された。

<sup>4</sup>水晶は台湾の文学研究者。著書に『張愛玲の小説芸術』（1973年）、『張愛玲未完』（1996年）など。中国大陸では上記2冊とその後書かれた張愛玲に関する文章をまとめた『替張愛玲補粧』（山東画報出版社、2004年）が刊行された。

<sup>5</sup>『水滸伝』に登場する人物。身軽な動きをとることから鼓上蚤（太鼓の上のノミ）というあだ名がついた。

<sup>6</sup>清末に起こり中華民国期に大流行した通俗文学。才子佳人の恋愛ものが多いことからこの名称がつけられた。

<sup>7</sup>周瘦鵑（1895 - 1968）は中華民国期に活躍した鴛鴦胡蝶派の作家、翻訳家。張愛玲の文壇デビュー作「沈香屑 第一炉香」そして「沈香屑 第二炉香」は、周が編集する雑誌『紫羅蘭』に掲載された。

<sup>8</sup>呉は現在の中国江蘇省一帯を指す地名。

<sup>9</sup>李涵秋（1873 - 1923）は中華民国初期に活躍した鴛鴦胡蝶派の作家。代表作に『広陵潮』（1919年）がある。

<sup>10</sup>「漁師」の原文は「討海人」。『漢語方言大詞典』第一巻（中華書局、1999年）によると、これは閩語（福建省南部で使われる方言）の語彙である。

<sup>11</sup>カーソンが司会を務めたテレビ番組「トゥナイト・ショー」のことだと思われる。

<sup>12</sup>『水滸伝』に登場する人物、王英のこと。背の低い男を指す。

<sup>13</sup>「攻撃されやすい弱点」のこと。

<sup>14</sup>夏志清（1921 - 2013）は中国文学者、コロンビア大学教授。著書『A History Of Modern Chinese Fiction 1917-1957』（Yale University Press、1961年）で張愛玲を高

く評価した。夏志清編註『張愛玲給我的信件』（聯合文学出版社、2013年）は張愛玲が夏氏に宛てた書簡を1冊にまとめたもの。

<sup>15</sup> 成語「依然故我」（わたしはわたしのままで、何も変わらない）をもじったもの。

<sup>16</sup> 関羽は三国時代の蜀の武将。民間信仰の対象でもあり、彼を祭る関帝廟が各地に存在する。

<sup>17</sup> 元の歴史を記した歴史書。二十四史のひとつ。

<sup>18</sup> 「曼麗琳林德西」の発音を中国大陸で用いられる発音記号ピンインで表記すると、Màn lì lín lín dé xī となる。張愛玲がどのような人名を音訳しているのかは不明。

<sup>19</sup> 「休柯菲尔徳」の発音をピンインで表記すると、Xiū Kēfēiěrdé となる。張愛玲がどのような人名を音訳しているのかは不明。

<sup>20</sup> 「ほんやりとしてはっきりしない」の原文は「灰鼠鼠」である。この語について、水晶氏は論文「那灰鼠鼠的一片——解読《茉莉花片》」（『替張愛玲補粧』所収、前掲）で「張愛玲の語彙において、“灰鼠鼠”は悪い一面を指す」と述べる。

<sup>21</sup> 現代中国語において、「、」と「,」とはそれぞれ異なる機能を有する。「、」は並列を表わし（頓号）、「,」は文のポーズを表わす（逗号）。

<sup>22</sup> 香港映画。1976年の作品。原作は古龍の武俠小説。

<sup>23</sup> 「・」は「間隔号」といい、現代中国語では月日や外国人名の姓名を区切るときに用いられる。

<sup>24</sup> 台湾映画。1977年の作品。邦題『空飛ぶ十字剣』。

<sup>25</sup> 『色、戒』は張愛玲の短編小説。1950年に執筆されたが、発表されたのは28年後の『中国時報・人間』1978年4月11日。アン・リー（李安）監督によって映画化され、2007年に公開。邦題『ラスト・コーション』。

<sup>26</sup> 『紅樓夢魘』は張愛玲の『紅樓夢』評論。1977年8月刊行。

<sup>27</sup> 英語では通常それぞれ three or four ～、seven or eight ～と表現する。

<sup>28</sup> 主語のない文を指すと思われる。